

CMS Letter

日本色覚差別撤廃の会・会報 No. 36

2011年12月

日本色覚差別撤廃の会事務局

〒211-0004 神奈川県川崎市中原区新丸子東 3-1100-12 かわさき市民活動センター気付

FAX 044-788-3509 HP <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~sgl/cms/>

専用メール cms@nodai.ac.jp

色覚差別から遠ざかっていた自分ができること

会員 西村 和典

本年、入会しました西村と申します。まずもって色覚障害者に対する故なき差別が、会の先達の方々のご努力により、着実に改善されていることに深く敬意を表するものです。

ところで、自身が色覚障害者であるということを明らかにされる方は少なく、横の繋がり、連帯に事欠く状況ですが、私の周りで同じ障害を持つ方を二人知りました。一人は私と容貌そっくりな母方の従兄弟、もう一人は職場の上司でした。従兄弟のことから母方の家系に遺伝があることを理解しました。上司には、足掛け6年間、直属の部下として仕えました。氏は、悲しいことに他界されましたが、懐かしさから、その思い出を述べさせていただきます。きっとお許しいただけると思います。氏は、学究肌を特に知事に見込まれ、県庁職員から県の教育長に抜擢されました。就任早々、並み居る校長連を前に、よどみなく教育論と自らの理想を訓示しました。その後、教育改革に取り組み、異色の教育長と評判をとりました。ところが、ある酒席で、「僕は色盲なんだよ」とふっと漏らされました。実は、教育委員会の幹部職員（大部分が教員出身者）の中で、教育長の不思議と影で言われていることがありました。教育学部卒で、教育に並々ならぬ思い入れのある教育長が、なぜ教員にならなかったのかという疑問です。氏は、このことを察し、疑問に回答したのではないかと思います。その後、教育長の不思議の話題は、職員の口の端にのぼることはありませんでした。氏ほどの栄達を遂げた方でさえ、色盲は重い現実だったのです。

私のことを振り返れば、大学進学に当たって、理系学部への進学、加えて、教員の道も閉ざされていることに打ちのめされました。特に、平等が建前の教育の世界で差別があることに幻滅しました。結果、経済学部に進み、卒業後、公務員になりました。幸いに、色覚差別のない職場で、その選択に悔いはありませんが、色覚差別ということがなかったら、違った人生もあったのではないかとほろ苦い思いがあります。現実の色覚差別に直面している青年とその父母に撤廃運動に取り組みといても無理があります。私を含め、色覚差別のない世界を歩みえた者が、そこで得た知識、経験、社会的地位を背景に、差別撤廃に取り組むべきだと思った次第です。

さて、入会申し込みのきっかけは、市内全戸に配布された市政公報を見たことにあります。そこには、一ページを使って消防士採用試験の記事があり、身体条件で「医療機関での検査において色覚が正常であること」の条件が付されていました。思い立って市役所を訪ね、消防士に第一に求められる能力は、体力と使命感であって、微かな色の識別能力ではないのではないか、色覚障害者を排除する科

学的、具体的理由を教えてくださいと言いました。消防署の人事担当者の回答は、火事場で火の色を見て、消火方法を即断しなければならないからだ、人を食ったものでした。呆れて、これ以上話すことは時間の無駄だと思いました。この度の大震災で正義の味方ともてはやされている消防士が、差別の問題には至って無神経となっていることは残念です。まだまだ、差別撤廃の前途には険しいものがあると実感したところです。

自己の人権に目覚める者が、他者の人権、心の痛みを思いやることができるということは真理でしょう。終わりに、諸先輩のご指導を切にお願いし、筆を置きます。

日本学校保健学会の市民フォーラムで報告しました

役員 鈴木 聡志

11月11～13日に名古屋大学で第58回日本学校保健学会が開催されました。最終日の午後は豊田講堂大ホールで市民公開フォーラムが開催され、第一部コラムニストのジョン・ギャスライト氏と弁護士宇都宮健児氏の講演の後、高柳泰世先生がオーガナイザーを務めるシンポジウムが二つ行われました。一つ目は「見えにくい子のサポートを考えましょー一関係者から見た弱視教育について」で、二つ目は「色覚異常は明度識別ですばらしい～色覚異常と人権～」。鈴木は二つ目のシンポジウムのパネリストとして「教育用色覚検査表CMTの有用性について」と題して、以下のような報告をしてきました。

* * * * *

石原式色覚検査表（以下、石原表）は、大変よくできた検査表です。色覚正常者に読めて色覚異常者に読めない表だけでなく、両者に同じように読める表や、両者で異なって読める表、さらには色覚正常者に読めず色覚異常者に読める表も含んでいて、この検査の目的である先天赤緑色覚異常を短時間のうちにふるい分ける能力に優れています。

しかしこうした検査としての優秀さは、色覚異常をもつ者にとって決してありがたいものではありませんでした。第一に、簡単に施行できるため、学校身体検査では大勢の同級生の見ている中で検査されることがありました。そして検査表を大多数の子ども達と違う読み方をした子どもは、他の子ども達から不思議がられるものでした。たとえ石原表が、色覚異常者に読めて正常者には読めない表を含んでいても、大多数の子ども達と違う読み方をしていることは誰の目にも明らかです。色覚異常をもつ者にとって、身体検査での出来事は決して消えない思い出になりました。

第二に、その結果が本人の進路を左右することがありました。石原表の「解説」にこのように書かれています。「色盲者」に不適當な職業は、鉄道員や船員で、なぜなら信号を見誤って事故を起こすからだ。また医師や薬剤師も不適當で、なぜなら診断や調剤を誤って他人に危害を及ぼすからだ、と。また、化学者、画家、染め物業者、印刷業者、呉服業者は「色盲者」に適さないと言います。学校ではこれを真に受けた進路指導が行われていました。

「色のなかまテストCMT」は教育用に作成され、子どもが見分けにくい色の組み合わせを見つけることを目的としています。練習用1枚、実用用4枚の計5枚のカードからなっていて、それぞれに5つの色が十字に並んでいる。検査者はこれを子どもに見せ、同じなかまの色が縦に並んでいるか横に並んでいるか尋ねます。誤答や「わからない」という答や迷いがある場合は、学習上の困難が予想されるので、教科書で見にくい色があるなら教師はそのような部分に斜線を入れるなどの配慮をします。

CMTは教育用に開発された検査表で、色覚異常者を見つけ出すのではなく、教育上の配慮を要する子どもを見つけ、どのような配慮が必要かの手がかりを与えることを目的としています。小学生くらいの発達段階では、子どもは他の子どもと同じであることが大切なので、いたずらに他の子どもと違うというレッテルを貼るのは避けるべきです。教師は教材や掲示物に色使いの一般的な配慮をした

上で、特別な配慮を要する子どもがいるならそれをします。CMTはそのための道具です。教育関係者には何のために検査を行うのかを考えていただきたいと思います。

心理学者エリクソンの発達段階説では、人生のそれぞれの段階に危機があります。これによると、児童期の危機は「勤勉性対劣等感」です。この時期に仲間と違っていることを知るのは、劣等感を生むおそれがあります。青年期の危機は「アイデンティティ対アイデンティティ混乱」です。この時期に仲間と違っていることを知るのは、自分の独自性を考えるきっかけになります。この説によるなら、先天色覚異常をもつ子どもがその事実を知るのは、自分の生き方を探求し始める青年期以降が適当だろうと思われれます。

「見づらい『ねんきん定期便』」のその後

幹事 羽岡 美智江

昨年 CMS Letter No.33 でお伝えした「ねんきん定期便」が、今年は配色を考慮した見やすくわかりやすいパンフレットとなって届きました。下地の色（薄緑）はそのまま文字の色が薄朱色から黒に変えて印刷されていました。

昨年、私は日本年金機構本部に電話で改善をお願いしました。その時対応して下さった参事役大野さんに、今年の10月24日にお礼の電話を入れたところ、「パンフレットの様式は、お客様のご意見を考慮し、各方面との調整を図り、専門デザインの人も入って審議しますから、当然お客様が指摘された赤とか下地の色を考慮しました。」とのことでした。

10月の定例会で、役員の方も「見やすくなったと思う。」と評価されていました。

〈新刊紹介〉色弱が世界を変える——カラーユニバーサルデザイン最前

線

伊賀公一著 太田出版 2011年5月 1800円＋税

著者の伊賀公一さんは55歳の男性。色弱者で、現在NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)理事です。この本は伊賀さんの、他人と異なる色覚を軸にした半生記です。

この本では「色弱」の語が使われていますが、もっといい表現があればいいのに、と伊賀さんも思っています。私も同感です。とりあえずこの語を使って本の内容を紹介しましょう。

伊賀さんは小学生のときに石原表で色弱であることを知りました。通信簿に「色盲」と書かれますが、1年生のうちはまだその意味がわかりません。そのうちに、お絵かきのときにクレヨンの色が区別できなくなるなど、困ったことが起きてきました。

科学が好きな子どもだった伊賀さんは、理科で生きてゆくことを希望していました。しかし中学で担任の先生から、「色弱は理科のほうには進めないよ」と言われ、ショックを受けました。それでも理科に熱中し、ラジオ作りに夢中でした。しかし高校3年生で文系へ進路変更。一浪の後、故郷の徳島から上京して東京の大学に入学しました。東京には7年いて、大学中退後に徳島へ戻り、コンピュータショップの店長をまかされました。それから再び上京してIT関連会社役員等を経た後、仲間達とCUDOをつくりました。

本書の特徴は、上のような半生記のところどころに挿入されている、色覚問題をテクノロジーによって解決していこうとする姿勢です。科学が好きと自認するように、伊賀さんは様々な道具を使って色弱者の色の見え方を正常者に説明して、知ってもらおうとします。そのための体験ツールが詰め込まれてあるカバンの中身を公開していますので、これは必見です。七つ道具どころか、17のツールを入れたカバンを伊賀さんは常に持ち歩いているとのこと。そしてこうした活動の結果、見えやす

く改善された実例もカラー写真でたくさん掲載されています。

伊賀さんは失敗談も率直に語っています。色の見え方が正常者と違うために起きた失敗を語るのは、そのことで色覚異常への偏見を増大させるかも知れず、微妙な問題です。しかし伊賀さんが失敗の経験を語るのは、事実を正しく知ることが大切との信念があるからだろうと、私には思えます。かつて同じことを医師が語った場合、だからこの仕事もこの資格も色覚異常者には禁止した方がいい、となりました。現在では、色覚異常について正しい理解を広く知ってもらうため、失敗したことや困ったことを当事者が率直に語るのがいいのかもしれませんが、この本には伊賀さんを中心とした家系図が載っています。このことは家族への信頼があっても、「勇氣」のいることのように私には思えました。

当事者の努力によって社会は変わる、という前向きな気持ちにさせる本です。会の皆様に一読されるようお勧めします。

(鈴木聡志)

専用メールのアドレスが変わりました

本会の電子メールとホームページの管理をされていた会員の吉田茂さんが、来年定年を迎えます。これに伴い、吉田さんの勤務先のコンピュータに開設していたメールアドレスとホームページが使用できなくなります。このため、専用メールの新アドレスを取得しました。新しいアドレスは

csm@nodai.ac.jp

です。

なお、近いうちにホームページも新しいサイトに移設し、これを機にデザインを一新する予定です。

(編集部)

CMS Letter 日本色覚差別撤廃の会・会報 No. 36
2011年12月24日 発行
発行人 石林紀四郎
編集・発行 日本色覚差別撤廃の会